

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑬

当館では、毎年上巳（じようし）の節句に合わせて（江戸から昭和にかけてのひな飾りを展示している。

江戸時代には内裏ひなを飾って祝う節句行事が定着したと言われているが、江戸時代終わりには、祭りの要素が加わって華やかさを増し、飾る人形の種類が増えていく。

三人官女、五人ばやし、隨身、仕丁といった現在でもおなじみの人形たちだけ

と三人官女、隨身、五人ばやしとつづき、その下の段には、浮世人形や雛（ひな）道具を所狭しと飾る。若い世代には、ひな飾りのイメージとかけ離れた浮世人形

昭和初期の段飾り

所狭しと並ぶ浮世人形



昭和初期の段飾り。県歴史文化博物館蔵。テーマ展「おひなまつり」で4月30日まで展示中

たちが並ぶことに違和感があるようだが、昭和初期のひな飾りでは普通に見られる光景であった。

3段目、4段目に並ぶ浮世人形たちは、親戚からお祝いで贈られたもので、女の子が誕生すると親戚たちは、お互いに贈る人形がかわらないよう相談しあっていたと聞く。

高砂II「尉（じよう）と姥（うば）」ともいうIIは必ずといってよいほど並ぶが、それ以外は源義経や小野小町、太田道灌といった歴史上の有名人を模したもので、「舌切り雀（すずめ）」、浦島太郎、桃太郎といったおとぎ話の登場人物までバラエティーに富む。また、着せ替え遊びのお

人形からお土産でもらった小さくてかわいいものたちが続々と出てくることもある。家人たちが手持ちのかわいいものたちをひな段に総動員していたのだろう。

現在では生活様式の変化などによりコンパクトなひな飾りが主流だ。時間をかけてたくさんの人形を並べる段飾りからは、節句行事を大切にすると昔前の人々の暮らしが垣間見える。

（専門学芸員・宇都宮美紀）

〈随時掲載します〉